

## 協働による神津島創生 ～ “もったいない資源” の繋ぎ合わせからの創生～

今瀬 政司（市民活動情報センター代表理事・地域活性学会離島振興部会事務局長・京都経済短期大学准教授）

Keyword： 地域創生、離島振興、地域資源、協働

### 【神津島創生の背景・目的】

神津島は伊豆諸島のほぼ中央に位置し、日本有数の美しい海、四季折々の花々が咲く山、島の各所から湧き出す湧水など自然環境に恵まれ、神話に由来する古い歴史や伝統を持ち、神社や寺、伝統行事や風習などが守り続けられている。豊富な海産資源の漁業、あしたばなど島特産の農業、マリンレジャー等の観光業などが主要産業となっている。

だが、島では空き家や遊休施設が目立ち、宿泊業者が減り、かつて栽培・収穫され食されていた島独自の生産物と共にその食習慣も減りつつあり、また島の地域活動を担う組織も活性化が求められるなど、島が持つ貴重な資源がまさに「もったいない」状態にある。

そこで、神津島の貴重な「もったいない資源」を見直し、それらを繋ぎ合わせ有効活用するとともに、新たな創造的活用を図り、次代の神津島を創生するために、2016年3月19～20日、『神津島創生シンポジウム～“もったいない資源”の繋ぎ合わせからの創生～ プラス「今後の離島振興のあり方～改めて日本の離島振興を問う～』を開催した。主催は、NPO法人市民活動情報センター、神津島郷（シマ）づくり研究会、地域活性学会離島振興部会、協力が国土交通省、後援が東京都神津島村、東海汽船(株)である。

### 【「協働」の輪の拡がりによる神津島創生】

神津島では島民有志たちがかねてよりシマおこしに取り組んできており、それを島外の神津島ファンが応援してきている。その一つが島民による神津島郷（シマ）づくり研究会であり、島外の市民活動情報センターである。この両団体のメンバーが離島振興に関わる者たちと協力して、2013年9月、地域活性学会に離島振興部会を創設した。「神津島創生シンポジウム」は、これら島内外の民間3団体が協働して手弁当のボランティアで企画、実施したものである。

3団体が企画を進める中で、「協働」事業の輪が広がっていき、国土交通省や東京都も公務で協力・参画いただけることになり、さらに地元神津島の村役場にも島（村）を挙げて、役場関係各課、村議会、農協、漁協、観光協会、商工会、CATV、島おこし若者グループ等の諸団体と共に、協力・参画いただけることになった。

同時期、国土交通省国土政策局離島振興課では、「離島振

興のあり方検討委員会」を開催して、「海業」の活用等による観光促進を起爆剤とした離島振興のあり方について検討を進め、離島振興施策の具体化へとつながる「離島振興アクション・プラン」の策定に取り組んでいたところであった。そこで、神津島創生シンポジウムのプログラムの中に、同アクション・プラン策定に係る内容を追加して、その素案報告を行うと共に、今後の展開を検討する場とした。

神津島創生や離島振興という同じ目的に向けて、島内外の民間団体・学会・自治体・国・企業等がそれぞれ自分たちの自前の費用と担い手と経営資源を持ち寄って、作業の役割分担を図り、「協働」で開催することになったのである。

### 【神津島創生シンポジウムの協働型開催】

神津島創生シンポジウムでは、まず一日目（3/19）に神津島フィールドワーク「もったいない資源巡り」と題して、島民有志が今後有効活用を図りたいと考える島の“もったいない資源”を巡る独自の視察コース（金毘羅様、流人墓地、神椿製油所、濤響寺、農協、レインボーファーム、ありま展望台、伊勢海老蓄養施設、赤崎遊歩道、どんたくハウス、漁協市場、よっちゃーれ、資料館、神津島酒造）を作った。視察の間の昼食交流会では、島民有志による郷土の手料理、島特産の丸ごと伊勢エビ料理、地域間交流を進める長野県のおやきやリンゴなどが豪華に並んだ。ただ当日、島は豪雨に襲われて、島外参加者の一部が飛行機や船の欠航で参加できなくなり、離島という地理的不利条件の現実とも向き合うこととなった（二日目は晴天となった）。

二日目（3/20）のシンポジウム本会議は、島の生きがい健康センターを会場にして、主催・協力・後援の開催各団体が経営資源を持ち寄って役割分担を図り手作りで準備を進め、島内外から50名を超える参加者を得て開催した。協力名義の国土交通省や後援名義の神津島村役場も、職員の労力や一部備品等を提供して協働で作業を担った。資金支援の関係（行政と民間の間でのお金のやり取り）は一切なく、上下の関係もなく、対等な自然体の関係で行った。

会議は、地元神津島村長の浜川謙夫氏と地域活性学会離島振興部会長の小島愛之助氏（(公財)日本離島センター専務理事）による開会挨拶の後、第1部「“もったいない資源”の繋ぎ合わせからの創生」と第2部「今後の離島振興のあ

り方～改めて日本の離島振興を問う～」にテーマを分けて会議を進めた。会議のコーディネーターは、筆者、市民活動情報センター代表理事の今瀬政司（長岡大学准教授（当時）、地域活性学会理事・離島振興部会事務局長）が務めた。

第一部では国土交通省官房審議官（国土政策局担当）の館逸志氏（地域活性学会副会長）が「離島における地域資源の活用」をテーマに基調講演を行った。続いて参加型円卓会議として、「神津島における“もったいない資源”の繋ぎ合わせからの創生」をテーマに、主催関係者が報告をした後、会場参加者全員で議論を行った。報告は、島外から松蔭大学教授の古賀学氏（離島振興部会副会長）、島内から神津島郷（シマ）づくり研究会事務局長の河合健一氏（離島振興部会副会長）、神津島レインボーファーム代表の清水靖男氏、かがり火天上のアイランド支局長の前田正代氏、七島花の会神津島支部事務局長の石田賢也氏が行った。

第2部では、国土交通省「離島振興のあり方検討委員会」委員の小島愛之助氏が「今後の離島振興のあり方～離島振興のあり方検討委員会での検討内容～」と題して基調報告を行った。続いて、国土交通省離島振興課課長補佐の金田拓也氏が「離島振興のあり方～離島振興アクション・プラン」（素案）の具体的な報告を行った。その上で、神津島村の議員・役場・諸団体の関係者が最初に意見を述べた後、参加型円卓会議として、「今後の離島振興の展開に向けて」と題して会場参加者全員で議論を行った。村長、村議会議員、役場職員（企画財政課、産業観光課、総務課）、農協・漁協・観光協会・商工会の役職員、島の若者、地域おこし協力隊、東京都島しょ振興担当課長、新島議員、島外からの若者など、様々な立場の参加者が意見を述べ合った。

### 【互いに見出した神津島の“もったいない資源”】

神津島フィールドワーク「もったいない資源巡り」と神津島創生シンポジウム会議を通して、参加者から神津島の“もったいない資源”が様々に見出された。

まず、神津島の“もったいない資源”の有効活用が既に模索されている例として、椿油の製油所（椿の実がもったいないとの思いから椿油づくり）、神津島酒造の蒸留粕利用（焼酎の粕と砂浜にある海藻がもったいないとの思いから堆肥づくり）、パッションフルーツのジャム加工（ハウス栽培で廃棄していたもの）、長野県との人的交流を活かした「あしたばおやき」商品化（60年前に始めた小学校の文通が一組だけ続いていたことが分かった縁で）などがあり、それらのさらなる有効活用や発展が検討された。

次に、“もったいない資源”として今後有効活用したいと

今瀬政司（地域活性学会「第8回研究大会」2016/9/4）する意見が次々と提案された。例えば、神津島は黒曜石が多く産出する島であり、かつてはそれが利用されていた。黒曜石からなる岩場は独特の海岸風景にもなっている。利用方法を探り商品化を検討したいとの意見が出た。黒曜石を研究している若手参加者からは、島から産出できる火山灰を使って人口で黒曜石を作りたいとの話も出された。

小学校の遠足場所で「だいたいあらし」と呼んでいたところがある。島の魅力を探しているうちに、「だいたい」が「たたら」だということが分かった。「あらし」は焼き畑のことであった。昭和20年～30年代に砂鉄を採っていたと聞いた。「もったいない資源巡り」で見えて回った金比羅山も、「たたら」に関係のある神様であることが分かった。

博物館に沈没船の資料が展示してある。沈没船を発見した時にお年寄りが千両箱や兜が沈んでいると聞いて潜ったら、御影石とすり鉢でがっかりしたが、もし千両箱であれば神津島は大金持ちであったらと書いてある。これこそ島のロマンである。忘れられたかつての島の歴史・文化・産業を“もったいない資源”として再評価して、新たな地域創生の取組みができないかとの意見も出された。

島の産物で食べなくなったもの、料理の仕方が島独特で若い人に引き継がれていないもの、商品開発に活用できていない郷土料理、農家の栽培地以外で成長して有効活用されていないアシタバ、市場で買い取ってもらえない小さいサイズの金目鯛、美味しい島のハガツオ、神津島の天上山にしかない花、「コウヅ」という名前を持つ植物、夕日の美しい前浜、観光名所の赤崎遊歩道へと続く風光明媚な道やドンタクハウス、伊豆七島の活かされていない連携可能性、失われつつある地域ぐるみの取組み、など次々と“もったいない資源”が出された。神津島のお年寄り作文集というものがあり、まさに“もったいない”ような神津の特徴や魅力、生活文化がいくらかでも書かれている、との意見もあった。そして、神津島の良いところを忘れていたり、知らせていないこと自体が“もったいない”と話された。

### 【今後の神津島創生に向けて】

神津島創生シンポジウムは、これまでに島内外の有志が行ってきたシマおこしの一つの節目となり、今後、島（村）を挙げて「協働」で新たな神津島創生に向けた取り組みを行うきっかけともなった。島の若者が先輩世代からシマおこしを引き継ぐ可能性の一つにもなった。

今後、“もったいない資源”の繋ぎ合わせからの神津島創生の取組みが少しずつでも着実に進むよう期待するとともに、筆者自身もその応援を続けていきたいと考えている。